

次世代サービスを実現する 待望のサービスデリバリープラットフォーム

広帯域ネットワーク網が整備され、ユビキタス/ブロードバンド時代に突入した通信事業者。いよいよ本格的なサービス競争の火蓋が切って落とされる。ライバルに差を付けるためには何が必要か。それはスピーディかつリーズナブルなサービス開発・実行環境を実現する「サービスデリバリープラットフォーム」だ。

来たるユビキタス/ブロードバンド社会は、いったいどんな姿をしているのだろうか。IPをベースにしたネットワーク・インフラは、整備されてきている。だが、その上で展開されるサービスの全体像と、それを提供するためのサービス・インフラについては、まだおぼろげだ。

今後、通信事業者は、ネットワークをベースとする通信キャリアから、付加価値サービスを提供するサービスプロバイダーへと脱皮していくだろう。自らが構築した広帯域のIP網を活用して、どんな魅力的なサービスを提供できるのか、それこそが競争に勝つための条件だ。

当然、幾多のサービスが生まれ、また消えていくはずだ。ヒット確実なサービスを作る方程式などは存在し

ない。だが、プロスポーツ選手の華麗なプレーの数々が強靱な肉体なくしては生まれないと同様に、サービス競争に勝つために不可欠な基盤なら存在する。最近、注目されている「サービスデリバリープラットフォーム(SDP)」である。

システムの水平統合を実現

SDPとは、通信事業者の次世代サービスを実現するサービス・インフラだ。ネットワーク・インフラと、付加価値サービスを提供するアプリケーションの中間に位置するサービス実行環境基盤である。

従来の通信事業者のサービスを支えるIT環境は、垂直方向に統合されており、電話やインターネット接続といった変化の少ないサービスモデル

には最適であった。しかし、これからのユビキタス時代においては、サービスを試行錯誤しながら展開する必要がある。サービスの開発、導入、そして運用を低コストでタイムリーに行う必要があるのだ。垂直統合型のIT環境では限界がある。

SDPを導入すれば、ネットワーク・インフラとアプリケーションをIT環境から独立させられる。そのため、より柔軟な仕組みでサービスの開発、提供が可能となる。あらゆるサービスが垂直・水平方向に統合され、サービス指向型(SOA)の環境を手に入れることができるのだ。例えば、VoIPとストリーミングサービスからなる複合サービスの環境に、オンライン会議のサービスを追加するシーンを想定してみよう。SIPサーバーへの連携やユーザー認証、課金システムへの請求情報を反映しなくてはならない。SDPを導入していれば、これらのコンポーネントは再利用が可能であり、サービスを提供するための時間とコストは、驚くほど低減されるだろう。

SDPを構成する技術要素

通信事業者の次世代サービスを支えるSDPは、サービス実行環境(Service Level Execution Environment: SLEE)と、サービス開発環境(Service Creation Environment: SCE)の2つの環境からなる。さらに、SDPは、複数のエンティティで構成される。例えば、付加価値アプリケーションを実行し、サービスのセッション

を制御する要素が不可欠であり、JAIN SLEEやSIPサブレットがその役割を担う。

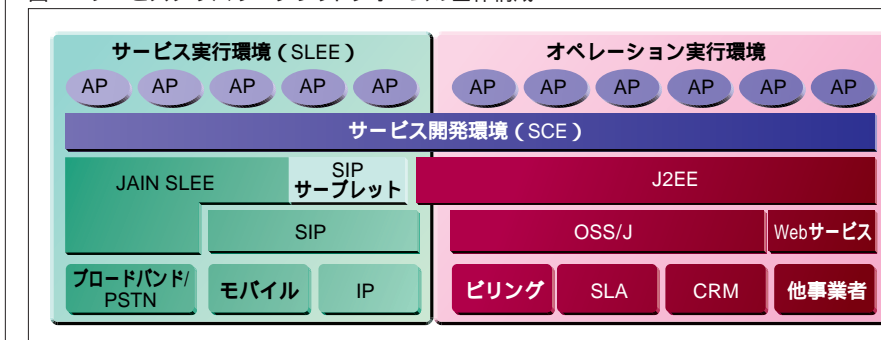
また、オペレーション系のシステム群との連携には、EAIやOSS/J OSS through Java) ルールエンジンが利用される。これらSDPを構成する要素の多くは、Javaテクノロジーをベースに、すでに製品として提供されている。IT業界でスタンダードの地位を確立済みのJavaは、通信業界というミッションクリティカル性の高い分野においても利用が始まっている。

Javaの優れた点は、まずポータビリティにある。「Write Once, Run Anywhere」という言葉のとおり、Javaは高い移植性を持つ。また、オープンな技術なため、多くのJava開発者が存在する。彼らが付加価値サービスを実現するアプリケーションを競って開発し、さまざまなサービスが市場に投入される期待は大きい。

ワイヤレスジャパンに出展

SDPは、決して未来の概念ではない。例えば欧州では、すでに多数の通信事業者が評価実験を実施中だ。

図2 サービスデリバリープラットフォームの全体構成



正式導入に踏み切る通信事業者もすでに現れている。

日本でも動きが本格化してきた。今年5月、日本BEAシステムズ、サン・マイクロシステムズ、NEC、アイログ、沖電気工業、日本オラクルのJavaベンダー6社は、「Java Technologies for Telco推進委員会(JT4T)」の設立準備委員会を結成。SDPの普及に向けて、各社の製品を連携した検証実験やSDP推奨アーキテクチャの提案などの活動を開始した。

その第一歩が、7月21日~23日に東京ビッグサイトで開催されるイベント「ワイヤレスジャパン」(<http://www.eric.co.jp/expo/wj2004>)での展示と講演だ。展示では各社のJavaベースの製品で構成されたSDPのデモ

が披露される予定である。

ユビキタス/ブロードバンドネットワーク時代の到来は、通信ビジネスそのものに変化をもたらす。SDPは、その次世代サービスを実現するために必要なサービス・インフラだ。ネットワーク・インフラと付加価値アプリを連携する新しい概念である。サービスプロバイダーへの脱皮は、ネットワーク・インフラの整備だけではできない。サービス・インフラの導入こそが勝敗を決定付ける重要なファクターになるであろう。

かつてパーソナルコンピュータの父、アラン・ケイは「未来を予測する最良の方法は、それを創造してしまうことだ」といったが、まさに通信事業者は未来創造のとば口に立っている。と同時に今は、これから激化するサービス競争に向けた、大事な岐路でもあるのだ。

図1 次世代サービスを支えるITプラットフォーム

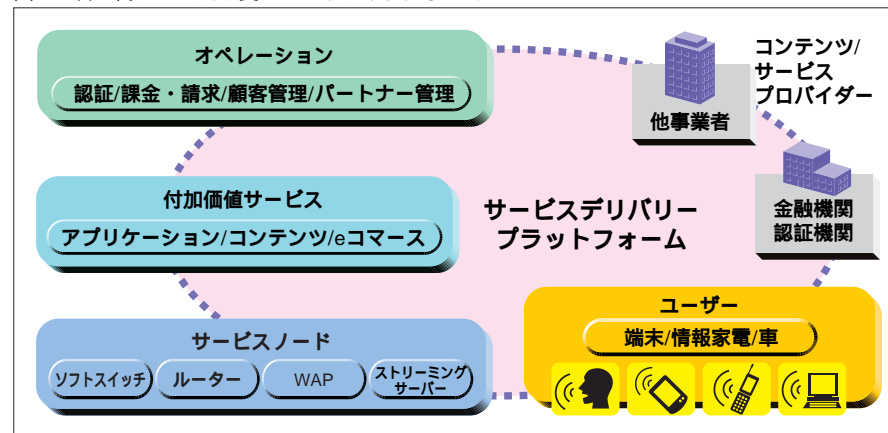
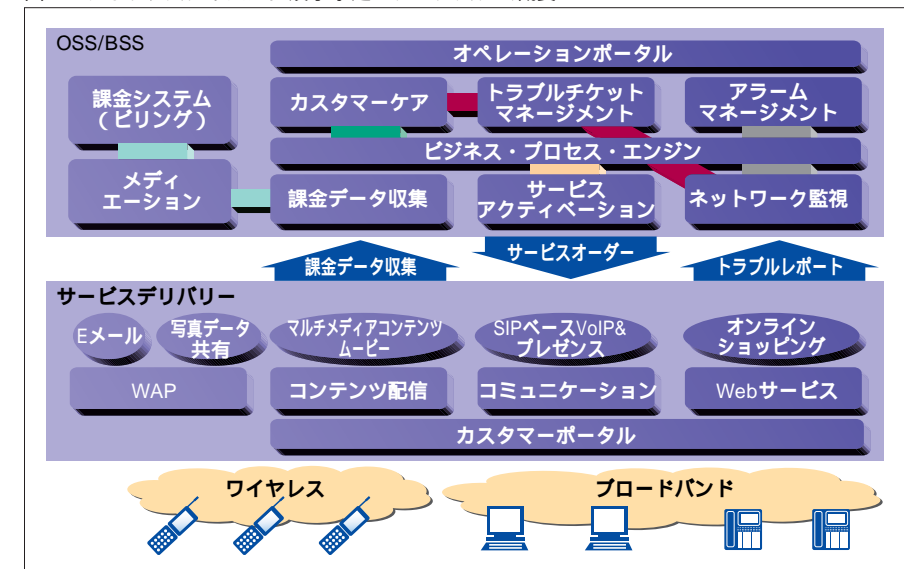


図3 ワイヤレスジャパンに展示予定のデモシステム概要



JT4Tメンバー

お問い合わせ先 info@jt4t.org